

「お酒くれへんと、骨、
抜きおるで旦那はん？」

オートスコアラー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

酒に飲まれて、闇に飲まれ

あつちにフラフラ、こっちへフラフラ

右手に神様、左手に旦那はん

火照った頭で、骨をしゃぶる

どこへ続くも分からぬ道で、ただただ思う。

(……酒、切らしてもうたわあ)

※注意

酒呑童子のキャラがあまり掴めてないかもしれません。

口調ガバガバ、キャラブレブレ

そもそも酒呑童子持っていない（↑ここ重要）エア酒呑童子持ち

※

10／23 酒呑童子引きました。書けば出る、みんなも小説書こう。

そんなんでもよろしければどうぞゆっくり見て言ってください。

目次

五酒	四酒	三酒	二酒	一酒
28	22	15	7	1

一酒

その鬼に隙を見せるな。

特に男は注意しろ。

隙を見せたその日には、骨ごと喰われるぞ。

その鬼の名前は……

酒呑童子

☆

「ほれほれ旦那はん？はよお酒持つて来へんと、旦那はんの骨抜き取つて飲み干しはつてしまふからの？」

「は、ハイハイ！」

町外れにある寂れた教会、その地下の一室で1人の男が1人の女に酒を渡していた。

男は白い髪に若い顔つき、対して女は幼いにも関わらず妖艶な笑みを浮かべ酒を喰ら

う。

「ちよいとそこの小鬼くん！君飲みすぎじゃないかい！」

「そないなこと言わんといてえな。うちにはこれがなきや生きていけへんのやから」

「毎日毎日ガバガバ飲みまくって！ベル君の稼ぎがなくなったらどうするんさ！」

「そんなときはうちで稼ぎおります。なんにせよ、今の酒は今しか飲めへんのやから、固い

ことは言わんといてえな」

「あー言えばこー言うのをいい加減やめろおお！」

そもそもどうしてこうなつたんだっけ？とベルは頭をひねった。それは数日前のこと。

いつもの様にダンジョンに行こうとしていた矢先、路地裏にさつと引き込まれてしまった。掴みかかった腕は細いののに何の抵抗もできず路地裏に倒れ込んでしまう。

「あらら、力、つよおかった？そらすまんことしたわあ」

上からくる言葉に目を開ければ、なんか痴女っぽい女の人があった。頭から角を生やし、体のほとんど最低限の部分しか隠してない黒い布貼りの様な刺繍らしきもの。前をはだけて隠す気もない着物を着て、盃と瓢箪を掲げた痴女。

あつ、これは関わっちゃいけないタイプの人だ。

咄嗟に逃げようとしたが、どこにそんな力があるのか押さえつけられてしまった。

「逃げへんとかれや、うち嫌われたおもて泣いてしまいたいわ」

言葉とは裏腹にずいぶん楽しそうにカラカラ笑っていた。いや、笑うのはいいんですが離してくれませんか？

「そやなあ、うちをふぁみりあに入れてくれたら考えなくもないんやけどなあ」

「入れます入れます！是非うちのファミリアに入団してください！」

するとパツと痴女が手を離してくれた。ようやく起き上がることができ、ゆつくりと立ち上がる。この数分でずいぶんと疲れた。

「ほんならこれからよろしゅうな。うちは酒呑童子。好きに呼んでな、旦那はん」

「だ、旦那さんは勘弁してください！」

「ふふつ、顔赤くして可愛らしいなあ。そないなことされたらうちも火照ってしまうわ」と、とにかく！一回うちに案内しますから、こつちです！」

逃げる様に駆け出してしまったが、許して欲しい。これ以上は精神的に持たないこと間違いなしだ。

☆

そんなわけで今に至る。

彼女、酒吞童子を最初に神様に紹介したときは正気を疑われた。まあこんなほぼ丸出しの女性連れ帰ってきてファミリアに入団するなんて言ったら誰でも驚くと思う。

本人は笑ってたけど神様の尋常じやない目線に堪忍したのか、ポツリポツリと、自分のことを話し始めた。

「うちは酒吞童子。鬼言われる種族やなあ。酒と珍しいもん集めるのが趣味やから、どうぞよろしゅう」

「鬼……てなんですか？」

「旦那はんたちとは、ちいと違う種やなあ。ほれ、こんな風に力持ちでねえ」

そう言つて僕のことを軽々と持ち上げる酒吞童子。力持ちなのも頷ける。

「そんなことはどうでもいいさ！ どうしてベル君の呼び方が旦那さんなんだい！」

気にするとかそんなんですか神様。

「そら気に入つてしまつてもんは仕方あらへんやんか。旦那はんを眺めると、腹の下がせつのおなつてしてもてな」

だからと言つて上氣した顔でお腹の下を撫でるのはやめて欲しい。自分でも自覚してるくらい顔が真っ赤なんだろう。証拠に神様がすっごい睨んできている。

「せやから、ここに世話してもらおおもてね。旦那はんにはちゃあんと許しもろてるからなあ」

「それはベル君の許可であって僕の許可じゃなあああい！」

そんなこんなでうちに住み着いてしまった1人の鬼？度々からかつてきては酒を飲む、たまに気が向いたらフラツと出かける。そんなことが続いた日だった。ついに神様の怒りが爆発したのだった。そして冒頭に戻る。

「せや、旦那はん、今日出かける用があつたんじゃ？」

「えっ？あ、もうこんな時間か！神様、僕今日は外で食事してきますので」

「……また他の女の子を引っ掛けてくるのかい？うちはもうギリギリ超えて弾け飛びそうなんだよ？」

「誤解です！」

そもそも酒吞さん（フルネームで呼んでたら好きに呼んでいいと言われたから短くして酒吞さんにしてる。呼び捨ては無理）のことだって、成り行きで決まったことだし。

ファミリアに入団すると言ったけど、神様に恩恵は貰ってないしダンジョンに潜ることもない。酒を飲むか出掛けるか。

普段どこで何をしてるのか、全く分からないのが彼女だ。ついでに言えば強いのかも分からない。

前に僕を軽々持ち上げて見せたけど、力持ちなだけではダンジョンに潜るのは些か無謀というものだ。

まあ酒呑さんなら大丈夫だろう。何故、とは上手く答えられないがなんとなくそんな気がする。まあそもそもがダンジョンに潜ってないのだし危険云々は意味のないことだろう。

「そや、旦那はん？うちも旦那はんの後ろ着いてつてよろし？」

「こらあああああ！君は今から説教だ！逃げられると思うなあ！」

これが、ふとした日に拾ってしまった鬼と、神様と、僕の物語。のちに鬼神と呼ばれる彼女との出会いの話。

二酒

「旦那はん？そんで行く言うはってたんはどの店なん？」

「えつと、豊穰の女主人でしたっけ？」

「うちに聞かれても答えられないわ」

「それもそうか。あの時シルさんにあつたのは僕だけなんだし。」

と、そんなことを話してたらいつの間にか店の前に着いていた。

「あ、ベルさんいらつしやい……ませ……」

「……ん、どうしたんですか？シルさん」

「えつ?!い、いや。そちらの方は……」

「そう言つて酒吞さんを指差すシルさん。」

「あの、その格好は流石に……ああでも！私はそんなベルさんでも嫌いじゃないですよ
！」

「いや待つてシルさん誤解だから。この人元から」

「そないな事言われたら悲しいわあ、旦那はんいけずやなあ」

「ほらあ！その人も否定してないですし。ベルさんつてもしかして……」

「いやほんと誤解ですから、酒呑さんも変なこと言わないでくださいよ」

酒呑さんは相変わらずカラカラと笑っていた。シルさんも疑いの目はやめてないけどとりあえず納得はしてくれた……はず。

「まあいいです。その辺はじっくり聞かせていただきますでしょうか」

とまあシルさんに連れられ入った「豊穰の女主人」だったが、普通に食事は美味しかった。ただ何をどう曲解されたのか僕と酒呑さんがとてつもない大食らい認定された。

僕はともかく、酒呑さんは大酒豪でいいと思う。今も空のジョッキ片手に盃で酒を呷っているし。

と、酒場内が騒がしくなった。どうやら団体客が来たみたいだ。

ていうか、あのアイズさんのいるロキーフアミアらしい。

全員見るからに高そうな装備に身を固めて、今日の遠征について話してるらしかった。けど、そのまま耳を傾けてたのがいけなかった。

「雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシユタインには釣り合わねえ」

悔しかった。否定したかった。そう思って喉まで出かかって居た言葉は結局出てくることは叶わなかった。

悔しさの余り、酒場から飛び出し当てもなく走り出す。目的なんてないし、今は頭の中に渦巻いてる衝動に身を任せられたかった。

そうして駆け出して行って、辿り着いたのはダンジョンの入り口。ポツカリと口を開けるその中に半ば自暴自棄気味に突入した。

☆

「食い逃げか？」

「うっわあ……ミア母ちゃんの店で食い逃げするなんて、命知らずなやつちやなあ」

「……」

「あの、私ベルさんのこと」

「いや、旦那はんならうちが後で探ささかい問題ありませんで。それよりも」

そういつて酒呑童子がふらりと立ち上がり、先程から盛り上がって居たロキーフアミリアのテーブルに向かった。

「ん？なんや姉ちゃんめつちや色っぽい服してんなあ！どや、うちのファミリア入らんか？」

「遠慮しときます、うちはもう他のファミリアにいることやし、又掛けるのも駄目やろ

「？」

「あちやー、もう取られてんのか！残念残念」

「それよりさっきの話、もうすこし聞かせとくれん？」

「なんやなんや、ベートの話に興味持つか！ベート女引っかける才能あるんちゃうか！」

「うるっせえよ！てかあんな雑魚のことなんざ何度も話す必要ねえだろ」

「あらあら、うちは気になりますわなあ。なんせうちの同じファミリアの子の話されたな気になりますがあ」

「空気が凍った。と言うよりは酒呑童子が垂れ流す殺気とベートの漏れ出した殺気がぶつかり、酒場内の会話が一齐に止まった。

「……てめえあの雑魚の仲間か？仲間のこと言われて腹立ててんのかよ」

「嫌やわあ。目え節穴かと思いはつたらなあんも知らへん畜生なん？うちが腹立ててる顔に見えると本気で思い？」

「アア?!殺されてえのかてめえ！」

「うるさい犬やなあ。そないな大声出したらお客さん驚くやん」

「表でやがれ！ぶちのめしてやる！」

「ちよつとベート座りなよ！あんた何考えてんのよ！」

「うるせえバカゾネス！てめえは黙ってろ！」

「売り言葉に買い言葉だな、フィン止めなくていいのか？」

事態を静観していたリヴェリアが団長のフィンに聞くが、当人のフィンは酒吞童子をじっと見つめていた。

「せやけど、そろそろ旦那はん迎え行かなあきまへんしここでお暇させてもらいます故」
「そう言い扉から出て行こうと酒吞童子が手を掛け

ベートの背後からの蹴りが酒吞童子の背に炸裂した。

「ちよベート！あんた何したか分かってんの!？」

「ベートやり過ぎだ！すこし落ち着け！」

「黙ってろって言ってるんだろ！」

激昂するベートを冷ややかに見つつ、蹴られた酒吞童子はゆっくりと起き上がった。

「てめえ逃げる気か？ここまで煽っておいて逃がすわけねえだろ」

「手負いの獣ほど気をつけ言いはるけど、頭に血の登った獣はもつと野蛮やなあ」

「ブチのめす！」

空気すら置いて行く勢いで薙ぎ払われたベートの脚撃。一瞬で背後を取り、無防備な

酒吞童子の頭にその一撃が入った。

普通ならば

「……なんや、えらいのんびりした脚やなあ。さつきまでの威勢はどないしたん？」

スツと、当てがわれた華奢な腕一本にベートの蹴りは阻まれていた。間髪入れず逆側から腕が、文字通り必殺の一撃として振るわれるがそれすらも防がれ、腕を引き摺られ地面へと叩きつけられる。

「嫌や嫌や、うちは旦那はん迎え行く言うてはるのに。話聞こえへんなら……多少痛い目見るのも堪忍やね」

地面に倒れ伏すベートの背中を押さえつけるように踏み抜く酒吞童子。抵抗するも、まるで何千の重しを乗せられたかの如く微動だにしなかった。

「テツメエ……！ 巫山戯てんのか！」

「黙れ犬。うちが手エ加えてるのは旦那はんのファミリアに迷惑かけへんようにしてるだけ、そんなくらは理解できひんか？」

そういうベートの脇腹目掛けて左脚を振り抜いた。先程までの手加減など微塵もなく、蹴り飛ばされたベートは豊穡の女主人の壁にぶち当たり、それでもなお止まらず壁を突き抜けて元いた席まで飛ばされた。

「うちも少しばかり気い立ってる。頭冷やすのがいいかと思うわあ。ほな、さいなら」

まるで今までのことなどなかったかのような振る舞いを見せる酒呑童子。誰も声をかけることなく、その姿は夜の街に消えて言った。

「……おい、さっきのなんだったんだ？」

「知らねえよ、でもベートったらロキⅡファミリアのLv5だろ？それをあんな……」
「やめとけ！あんま話してつと俺らも目つけられるぞ」

徐々に騒がしさを取り戻す酒場内は先程のことで持ちきりになっていた。

「なんや、偉いキレ方しよるなああの姉ちゃん！あんな殺気垂れ流すの久しぶりに見たわ」

「ちよつとベート！さつさと起きる……て気絶してんじゃん！」

「すまない店主殿。うちの者が壁に穴を開けてしまつて」

「いいさ、明日にでもあの子らに払ってもらうよ。食事代も貰つてないしついでき」

「すまない……フィン、先程からどうした。何も喋らないで」

「……悪かつた。すこし気になることがあつてね」

別にフィンはりヴェリアの言つていたことを聞いてなかつたわけではない。ただそれでも耳に入つてこなかつた。

彼女がこちらに来てから執拗に疼く自らの親指をみて思う。

彼女の真意を見極める、と。

三酒

「くそっ……くそー！」

当てがあるわけじゃない。でも、今はこの燻るような熱をどうにかしたかった。ただそれだけの為にダンジョンを駆け抜ける。

既に何階層なのか、どれほどの時間が経ったのか、そもそも今自分はどこにいるのかすら頭に入っていない。

「雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシユタインには釣り合わねえ」

「くそ……」

頭に響く言葉が何処までも体に侵食する。認めたくない事実動きが精細を欠き始める。

「僕は……」

気が付けばモンスターの大量に囲まれていた。そんなことにも気づかないくらい疲弊しきっていた。

でも、この位あの人なら片手間に倒せる。あの人なら……

血の滴る体に鞭を打ち、頭に無理やり酸素を送り込む。喉が焼けるように熱い。視界も半分ぼやけている。でも

「僕は……こんな所で止まりたくない……!」

前へと進む。モンスターの群れがなんだっていうんだ。僕の目標はこんな所じゃない。遙か先だ。

だから

「だから……そこを退け!」

☆

辿り着いた時には全てが終わっていた。

大量に散らばった魔石の欠片に混じるモンスターのドロップアイテム。その中に佇むベル。

いや、正確にいうなら既に意識はない。

「立ったまま気絶しはるなんて。器用なんやか不器用なんやか」

酒呑童子は笑みを浮かべた。いつもの蠱惑的な、言うならば捕食者のような笑みでは

なく。まるで自らの子が1つ大人になった瞬間を見たかのような、そんな優しい笑みを。

「なんも聞かへんよ、なんも言わん。でも、よう頑張りはったな」

気絶したベルを抱き上げ、元来た道を引き返す。その足取りは軽く上気した顔でベルを眺める。

「……なんや、前はえらいかわええ顔してはったのに。こない凛々しくなりはって」

どうやらベルは答えを出せたようだ。ベルの表情から察した酒呑童子はダンジョンを抜けホームへと帰還した。

「あつ！全く何処をほつつき歩いて……ベル君?!」

ホームへと帰るなりヘステイアが傷だらけのベルを見つけ看病を始めた。それを眺めつつ今日起きた事をヘステイアに説明する。勿論酒場での喧嘩は伏せて。

「……そうか、そんなことがあったんだね」

「心配したん?」

「心配は……してるけど。ベル君の事は短い僕でもそれなりに分かるよ」

ウブですぐ女の子を引つ掛けて何にも知らないみたいな純情だけど、一度決めたら諦めない無鉄砲さも持つてる。正直言って危ういと言うか、見てて心配にならない事はない。でも

「でも……ベル君が決めた事だ。僕はそれを応援するし、ベル君を支える」

「……そか」

「君はどうなんだい？」

「うちか？」

「君は今のベル君を見て、どう思ってるんだい？」

そう問われ、ベルを見つめる。あどけない表情で眠りについているベル。

「そやなあ……うちは旦那はんがやりたい言うなら別に口出したりせえへんよ」

「……そうかい」

「……なあ」

「なんだい？」

「うちに恩恵くれへんか？」

その申し出に少なからずヘステイアは驚いた。今の今まで酒吞童子がダンジョンに行こうとするそぶりは唯の一度も見ることがなかったから。

「急にどうしたんだい？」

「なんや、氣い変わったわ。旦那はんがこない頑張ってんや、うちも手伝いくらいせな思ってたなあ」

「それはいい事だよ、惜しいのは最初からその考えに至つて欲しかった」

「そら悪うござんしたあ」

「まあいいさ。ほら、恩恵を与えるからさつさとベッド……はベル君がいるし。そのソファアに寝転がってくれよ」

「ほな、よろしやす」

ソファアに寝転がり上衣をはだけさせ（元から殆どはだけてるが）背中を露出する。その上に跨り、針を持って恩恵を書き込んでいくへステイア。

「……君は、今まで何をして来たんだい？」

「そら、楽しいこと、嫌なこと、いろいろありますがな。そやけど退屈いうはるのは無縁な生活やったわなあ」

「そりやそうだろうね。普段の君を見れば分かるよ」

「おおきに」

「褒めてない」

立ち上がり、紙にスラスラと何かを書き込んでいくへステイア。そして終わったのか、酒呑童子に突きつけて来た。

「とりあえず君のステイアスだ。言つとくが誰にも喋らないように、バレたら面倒なことになるからね」

「そないな顔で言われたら恐ろしゅうて口開かへんわあ」

酒呑童子 Lv1

力：823 A

耐久：769 B

器用：670 C

敏捷：819 A

魔力：895 A

《魔法》

【宝具】

千紫万紅・神使鬼毒せんしばんこう・しんべんきどく

・ 投影魔法

・ 対象への一時的ステータス低下付与、対象のステータスを一時的に自分に付与

・ 一定量の酒気を帯びる事で使用可能

・ 詠唱式『魔酒の酔夢、鬼々京狂、死にはつたらよろしおす』

《スキル》

【果実の酒気】

・ 対象への魅了付与

・対象の行動阻害率上昇

・酒気を帯びる毎に効果上昇

【鬼種の魔】

・ステイタスの一時的上昇

・魔法威力の一時的大幅上昇

・酒気を帯びる毎に効果上昇

【戦闘続行】

・ステイタスの耐久値の一時的大幅上昇

・酒気の蓄積量により補正率上昇

・酔いを醒ます

「まったく、ステイタスまで飲兵衛なのかい？」

「嫌やわあ、うちの血には酒が混じってはるんよ。そらこうなりますわ」

「冗談が言えるくらいには頭も回ってるみたいだね」

「おおきに」

「だから褒めてないって言ってるだろう！」

四酒

次の日、ベルもヘステイアもまだ眠っている時刻、日も出かかっている時間帯に酒呑童子は起き出した。

軽く支度を済ませ教会から出て行く。向かう先はダンジョンだった。

「えらいはよおに出てしまったけど、こないならゆっくりしてから来るべきやったなあ」
ダンジョンに向かう途中で食事を買えばいいと安易に考えていたが、まだ完全な日の出には程遠く、商店街も閑散としていた。

仕方ないと、肩を落としてダンジョンに向かう酒呑童子。さすがに酒ばかりでは腹は膨れないようだった。

そうこうしている間に辿りついた。昨日とはまた違う印象を与えて来るダンジョンの入り口。

中に入り進んで行くと中はほんのりと明るく特に視界に不便はなさそうだった。昨日はベルを迎えに行くことしか考えてなかったが、こうして見ると意外と発見が出て来るものだ。

「さてと、特に考えへんかったけど、まあ死なへんように降りましょか」

一人で来たのはこれが初のダンジョンだが、特に気負った気配もなく、サクサクとダンジョンを進んで行く……はずだった。

「嫌やわあ、うち道分からんから進まへんやない」

ダンジョンとはただの一本道ではない。幾多もの分岐が存在し迷路のように道を形成している。そこに地図もなしに単身突入すれば迷い込むのも当然だった。

「旦那はんに……は怒られなさそうやけど、あの神様はめっちゃ怒るんやろなあ。ああ嫌や嫌や」

と、少し先の壁にヒビ割れが入った。そのヒビ割れは徐々に広がっていき、やがてモンスターを生み出した。

コボルト、ダンジョン内では初心者冒険者がまず当たる敵としてある意味一番有名な敵だ。

コボルトは酒呑童子に気がついたのか、ギィギィと威嚇しつつも距離を保っていた。少ない理性で危険な相手と判断したようだった。

「どげや」

が、酒呑童子の睨みつけで尻を巻くように逃げていった。肩をすくめるように落胆する酒呑童子。単に睨んだだけで逃げたことに不満のようだった。

その後も敵対はするが逃げる敵ばかり、徐々に階層を増やすうちに流石に酒呑童子も

飽きが回ってきた辺りで新たな敵が現れた。

ウオーシャドウ、全身が黒色の人形。長く伸びた腕の先には三本の鋭い爪が備わっている。酒呑童子を見ても逃げるばかりか、敵意を強めている。

「やつと骨のある奴が来はったか。あんだだけ暇したんや、簡単に終わらんと頼みます」
じりじりと間合いを詰めるように徐々にウオーシャドウが近づいてくる。それを眺めるように力を抜く酒呑童子。

間髪おかずにウオーシャドウが切り掛かってきた。右腕を振るい酒呑童子を斬り裂こうとするが、腕の隙間に潜り込むように回避しお返しとばかりにがら空きの胴に手加減気味の拳を叩き込む。

紙吹雪のように飛んで行くウオーシャドウ。そのままの勢いで壁にぶち当たるとそのまま動かなくなつた。

「……なんやあ、手加減したはずやんなけどなあ」

本人は手加減したと思っていたが、それでも存外に力がこもっていたらしく一撃で相手を叩きのめしてしまった。せつかくの敵を瞬殺してしまったことに保っていた熱も徐々に冷めてきた。

「……今日はもう終いやなあ。でも帰り道わからへんし、どないしよ」

最悪の場合は野宿。そう考えていると通路の反対側から誰かが歩いて来た。

「あらら」

「ん？あつ、昨日の人！」

「おや」

「……チツ」

はたして、そこに居たのは昨日の酒場であつたロキーフアミアリアだつた。驚き、意外、嫌悪、反応はそれぞれあつたが。

「やあ、確か昨日酒場で迷惑をかけたしまつたね。その節は申し訳なかつた」

そのうちの一人が謝罪をしてきた。周りよりも一回り背丈が低いが、発している気は誰よりも大きく、嫌が応にも実力者であることを示して居た。

酒呑童子にはさして気にならないことではあつたが。

「ええで、ただ暴れてる犬を躡けただけや。うちも退屈しのぎにはなつたしな」

「んだとー！」

「ベート、それ以上は許さない。悪かつたね、お詫びというわけではないが、僕に出来ることなら何か君の助けになるよ」

「そら有り難いわあ」

「……とこらで、君に聞きたいことがあつてね」

途端、空気が張り詰めた。先程までのゆるい雰囲気は無くなつた。

「君が良ければだが、僕たちのファミリアに來ないかい？」

「……なんて？」

「君が良ければだが僕たちのファミリアに來ないかい？ 自慢する訳ではないが、こちらのファミリアはそこそこ大きい。今のファミリアに愛着があるなら無理にとは言わないけど。もし違うなら

「……ンフ……フフフハハハハハハ!!」

ロキィファミリア団長、フィンの声を遮り酒呑童子が狂ったように笑い出した。濃厚な殺気が漏れ出し、目元もつり上り、纏っていた気だるげな雰囲気も霧散した。

「黙って聴いてたら色々言われたけど、あんたは、随分と冗談が下手くそなんやね」

「冗談のつもりはなかったんだけどね」

「なんなら頭開いて中覗いてみたらどうや？ 虫喰いだらけの脳みそが出てくるんやないか？」

「君の気に障ったなら謝るよ、此方としてもなんと無く誘ってみただけさ」

「別に氣い障ったことない。目の前で間抜けが笑いとろおしてたから笑っただけや」

「あんたねえ！さっきから団長のこと馬鹿にしてんの?!ぶった斬るわよ！」

「嫌や嫌や、すつからかんの頭にうるさい猿、勝手に噛み付く犬までいて。なんや残りは雉連れてきてうちのこと退治でもすると?」

「分かったいいわ上等よ、ぶった斬る！」

一人がその身の丈以上の武器を取り出して、しかし団長の手に遮られた。

「団長！」

「下がりなテイオネ、重ね重ね悪かった。不躰な質問だったよ」

「そら躰けのなつてない獣連れてるのみたらわかるわ、うち暇と違うからはよ帰りたい……そっや」

そこで、ふと思いついたように酒吞童子は今までの雰囲気を消し去り問うた。

「出来る範囲で助けてくれるんやつたなあ。うち、ダンジョン来るの初めてやから出口まで案内してくれると助かるわあ」

「……分かった、アイズ。行ってくれるかい?」

「……うん」

「ほな、おおきに。またどこかで会いましょか」

「ああ、きつと君とはまたどこか出会うだろうね」

そうして後は、振り返ることなくアイズをお供に酒吞童子は去っていった。

五酒

「……………」

「……なに、緊張でもしとる？」

「いや、そうじゃないけど……」

そう言つて、アイズがチラチラと目線を向けるのは額に突き出た一对の角。それに気づいた酒呑童子は薄い笑みを浮かべながら問いかけた。

「なんや、うちのコレが気になる？」

「気になる、より……種族的になんなのかなって」

「うちは鬼や、あんたら人とは違う種族。人を騙し、人を揶揄い、そんなもって……」
そこで切り、口元が若干釣り上がりながら

「人を喰らう存在や」

眩いた。

☆

「おおきに、助かったわあ」

「……次は地図持つてく方がいいです」

「そうやなあ、今度行くときはもっていくとしましょか。旦那はんにその辺聞いてみる、ありがとさん」

「今度は？」

「実は一度来ててな、あのチビがうるさい思うてめんどくさかったから誤魔化したんよ」
「……前はどうかやって出たんですか」

「そら旦那はんへの愛やね。」

おおきに、とお礼を言いながらホームに帰っていく酒吞童子を見送り、踵を返し自分のホームに戻るアイズ。頭に思い浮かぶのは先ほどの酒吞童子の言葉。

「人を喰らう？」

「そう、あつちへふらふら、こつちへふらふら、たまにお山に帰って、気が向いたら京に行つて人を喰らう。それがうちのこれまで」

「……本当に？頭からバリバリって」

「腕から行く方がうちは好みやなあ」

「……………」

「別に理解しなくていいよ、うちのこと理解でき言うんは茨木と小僧くらいやから。あとは……まああの牛乳はもう会うこともあらへんしいいか」

「……鬼つて、モンスターなんですか?」

「力強うて、酒が好きで飲兵衛で、角が生えてる。たしかに、もんすたーやね」

そこでまた口を閉ざすアイズ。見た目は、まあ、角と服装に目を瞑れば普通の人だ。というかアマゾネス姉妹の方がもう少し肌色が強いくらいだし。

ただ、彼女は人を喰らう。無論、ダンジョンにも人を喰らう凶悪なモンスターはいる。しかしどれもこれも醜悪な見た目だからこそ、アイズは躊躇なく切り飛ばせたのだ。もしも

「もしもうちが敵対したら?、なんて考えてる顔しとるなあ」

驚愕した。考えを読まれていたこと、にではない。何故そこまで心底楽しそうな表情で笑えるのか。

考えの読めない酒呑童子を見つめていると酒呑童子が提案を出してきた。

「そないにうちの事気になるなら、賭けでもしましよか?」

「賭け?」

「そや、うちとあんたで戦って勝った方がいうこと聞く。分かりやすくてよろしやろ」

「……失礼だけど、貴方って戦えるの?あんまりそういう感じ、しないけど」

「見た目で判断してると、痛い目見るで？」

「……受ける」

「そらよかった。でも、今日はもう遅いから、また明日にしましょか」

「……明日迎えに行くから」

「そないに睨みつけんでも逃げやしないわ」

彼女は、モンスターなんだろうか？

見た目はまあ、確かにモンスターでもあり人でもある。話も通じるしいつもモンスターから感じてる殺気とは違う雰囲気だった。

でも、今日の団長を笑ってた時の雰囲気は、モンスターに近かった。と言うことは、あれが彼女の本性？

まあ、どちらにせよ明日にはわかる。

☆

朝、つまりは勝手に抜け出した挙句、冒険者登録もせずにダンジョンに潜り、剩え夜

も明けるといふ時間に帰ってきた日の朝。

まあつまりは、

「君つてやつはほんつつつつつとうに本能でしか行動できないのか?!」

「ま、まあまあ神様。こうして無事に帰つて来てくれたんですし、いいんじゃないですか?」

「ベル君も甘い!ここはビシツと言わないとまーたすぐ同じことするんだぞ!」

「嫌やわあ、そないに虐めんといてくれや」

「教育的指導だ!」

左にベル、右にヘステイアに囲まれて昨日のことを散々聞き出された朝だった。朝帰りのことに関してには許してもらえたのだが自由奔放すぎるところにヘステイアが嘯み付いた次第であった。

「それ、で?朝帰りをして来た君は?ロキルフアミアのアイズ何某に喧嘩を売つて?おまけに朝から酒三昧と?」

「ええやろ、あんたさんも飲むか?」

「だあれが飲むか!だいたいこれから戦うつてのにアルコール入れるとはどんな頭してんだい!」

「か、神様、そろそろつきますんで落ち着きましょう?ね、ね?」

そんなこんながあつてたどり着いたロキールファミリアの本拠地、黄昏の館。流石はオリオトップを争うファミリアなだけはある、ヘスティア達のそれとは比べるまでもないほど大きかった。

「なんや、やっと来たのかドチビ！アイズたんが待つてるさかい、さつさと用意しときなドチビ！」

「ドチビドチビうるっさいんだよ貧乳絶壁！うちの子がコテンパンにしてやるからさつさと案内しろ！」

「なんやと！やんのか！と早速喧嘩腰になる神様とそれをいさめようとするベルを尻目に、酒呑童子は館の中に入っていった。

「……ふーん、まあ、そこそこなもんやなあ」

「そうかい？僕から見たら結構だとは思うけどね」

視線をあげると、そこにはダンジョンにいたあの背の小さな団長が立っていた。

「あら、すまんなあ。背え小さいから気づかんかったわあ」

「別にいいさ、背丈は僕たちの種族の特徴さ。それよりも訓練場でアイズが待つてる案内するよ」

先導するフィンに従い、後を追う酒呑童子。会話もなく、ただ黙々と目的地に案内するフィンとついていく酒呑童子。そしていくつかの角を曲がり、木製の大きな扉の前に

着いた。

「さて、中でアイズが待つてる。それじゃあよろしく頼むよ?」

「別にあんたさんに頼まれた訳やないし、そないなと言われてもなんもできへんよ?」

「ははっ、単にアイズを頼むといっただけだよ。客人を傷つけたら大変だろう?」

「よく言うわ、まあ安心しとき。五体満足ぐらいで勘弁しといたるから」

方や、気遣いの中に毒を混ぜ。方や、Lv5の冒険者に手加減をすると言い放つ。少女を置き去りに、見えないところで争いは着々と激化していた。